



TITLE:

マルコ・ポーロ旅行記の近刊諸校 註本に就いて(上)

AUTHOR(S):

藤枝, 晃

CITATION:

藤枝, 晃. マルコ・ポーロ旅行記の近刊諸校註本に就いて(上). 東洋史研究 1938, 3(3): 231-242

ISSUE DATE:

1938-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145607>

RIGHT:

マルコ・ポーロ旅行記の近刊諸校註本に就いて(上)

藤 枝 晃

目 次

- 緒 言
- 一、ベネデット本 (未完)、以下次號
- 二、同 英譯本
- 三、フランプトン本
- 四、シアリニョン本
- 五、其他の諸本

緒 言

マルコ・ポーロ「東方旅行記」の一部——主として北支那地方の部分に就いて註解を試みんとするのが、私の目的であるが、其に先立つて近刊の諸校註本の性質を一應書きつけておく必要を認めたので此の小篇を草した次第である。

マルコ・ポーロ旅行記に關して從來我々はイギリス

の故ユール大佐の校勘譯註並にフランスの故コルディエ教授の補訂増註本^①を以て其のスタンダード・エディションとしてゐたのであつたが、此書が出て後今日まで十餘年の間にイタリアのベネデット教授の校勘本を初めとし、ペンザー編輯のフランプトン英譯本、北京の故シアリニョンの註解本、其他數種の版本が刊行され、就中ベネデットの書の如き本旅行記研究史上に一大轉機を齎した重要研究も現はるゝに至り、我々は今日從前通りの態度で此の旅行記を扱ふわけにはゆかなくなつた。それで斯る新研究の結果を一々の本に就いて説くことゝしたのであるが、其の前に此の旅行記の成立・傳來に就いて從來は如何なる見解が行はれてゐたかを一通り云はねばならないと思ふ。

併し詳細に之を述べる事は紙數も許さず、且さして必要なことではない。ユールの校註本の卷頭に此の旅

行記の成立、傳來を考へた精しい研究があり、手近なところでは石田幹之助、田保橋潔、其他の諸氏のユール説を要約した解題があるから就いて見られたい。^③今舊説の差しあたつて必要な點だけを申せば、

(一) パリ國民圖書館所藏の寫本 fr. 1116 (即ち世に謂ふ所の地理協會本、此に就いては後に詳しく述べる) は疑もなくゼノヴの獄中で作られた祖本の正しい寫しである。

(二) ポーティエが彼の版の底本に用ひた諸寫本は、間々不正確な點もあるが、マルコ・ポーロ自身が手を下して監修した校訂本に由來するものである。

(三) 現存するマルコ・ポーロ旅行記の編輯本はすべて直接・間接に地理協會本に由來する。

(四) ラムージオ本のみに見える行文は、古くは或は偽作と考へられたこともあり、結局は補助的な、まづい追記と考へられた。(以上詳しくはユール・コルディエ本序論第十章五五—六四節、九〇—一〇一頁を参照されたい)。

然るに今迄定説となつてゐた此等の見解はベネデットに依つて悉く打破されたのである。

序にユール・コルディエ本に就いても一言しておかう。今日我々がユール・コルディエ本を扱ふ上に最も注意せねばならぬ點は其のテキストにある。烈しい熱情と明徹な觀察力を以てマルコ・ポーロの研究に精根を傾けて劃期的な業績を遺したユールも舊來の謬説から充分脱却する事が出来なかつた。彼は諸寫本を比較検討して「地理協會本」が最善本であつて其の文體は原のまゝのものと認めて居ながら、翻譯の底本にはポーティエ本を採用し、其の譯文を地理協會本と對比して校訂し、之に削繁を加へたのであつた。^④それで今日見る如くユール本の文章は無味乾燥、雅趣に乏しいものとなつて了つてゐるが、後に説く如く旅行記の原文は決して斯様に調子の低いものではなく、豊かな修辭を盛つた精彩ある筆致で書かれたものであつた。それに止まらず、地理協會本に記されてある事項のユール本に洩れてゐるものすら間々見うけられる。斯様な次第であるからユール・コルディエ版は、註釋は別として其の本文はベネデット版の出でゐる今日最上の信頼を置くに足りない。

先づ此の位承知して頂いて以下ベネデット本

から順次述べることにする。

註

- ① The Book of Ser Marco Polo, The Venetian. Concerning the Kingdoms and Marvels of the East, translated and edited, with notes, by Colonel Sir Henry Yule. Third edition revised throughout in the light of recent discoveries by Henri Cordier (of Paris). With a Memoir of Henry Yule by his daughter Amy Frances Yule. In two volumes. With Maps and Illustrations. London, 1926.
- Ser Marco Polo. Notes and Addenda to Sir Henry Yule's Edition, Containing the Results of Research and Discovery. By Henri Cordier. With Frontispiece. London, 1920.
- ② 1. Marco Polo Il Milione, Prima edizione integrale a cura di Luigi Foscolo Benedetto sotto la patronato della Città di Venezia. (Comitato Geografico Nazionale Italiano Pubblicazione n. 3) Firenze, 1928
2. The Travels of Marco Polo. Translated into English from the Text of L. F. Benvenuto by Professor Aldo Ricci. With an Introduction and Index by Sir E. Denison Ross. (The Broadway Travellers Edited by Sir E. D. Ross and Eileen Power). London, 1931.
3. Le Livre de Marco Polo. Citoien de Venise.
- Haut Fonctionnaire à la Cour de Koubilai-Khan, Généralissime des Armées Mongoles, gouverneur de Province, Ambassadeur du Grand Khan vers l'Indo-Chine, les Indes, la Perse et les Royaumes Chrétiens d'Occident, rédigé en français sous la dictée de l'auteur en 1298 Par Lusticien de Pise, revu et corrigé par Marco Polo lui-même, en 1307, publié par G. Pauthier en 1867, traduit en français moderne et annoté d'après les sources chinoises par A. J. H. Charignon. 3 vols. Pékin, 1924.
4. The Most Noble and Famous Travels of Marco Polo together with the Travels of Nicolo de' Conti. Edited from the Elizabethan Translation of John Frampton with Introduction, Notes and Appendixes by N. M. Penzer. London, 1929.
5. Ed. H. von Tscharnner : Der mitteldeutsche Marco Polo nach der Admonter Handschrift. (Deutsche Texte des Mittelalters. Pr. Aka. d. Wiss. vol. XL.)
6. The Travels of Marco Polo (The Venetian). Edited with Introduction by Manuel Komroff. Garden City & New York, 1926, 1930.
- (⑦の邦譯) 深澤正策氏「マルコ・ポーロ旅行記」其他ハヤシマン文庫本、くろまん獨譯本等。
- ⑧ 石田幹之助氏「歐人の支那研究」七九頁以後。
- 田保橋潔氏「マルコ・ポーロの地理史的研究」(上)歴史

地理第六十四卷第四號(昭和九年四月)

外務省調査部譯ウエ・バルトリド著「歐洲殊にロシアに於ける東洋研究史」第一篇第五章

深澤正策氏「マルコ・ポーロ旅行記」卷頭解題

⑤ Yule-Cordier, *ibid.* Vol. I, p. 141.

一、ベネデット本

此の本は一九二八年の刊行、四折判五百頁に餘る大冊で、其の前半の「序論」は「寫本の傳承」と題され二百二十餘頁に涉つて諸寫本の傳來の系統が考證され後半の本文は精密に校訂された所謂地理協會本のテキストに校勘記及他の諸本に見える缺文が註記されており、他に索引及諸寫本の寫眞が附せられてある。

著者 Luigi Foscolo Benedetto はフィレンツェ大學の佛文學の教授である。彼は三ヶ年の日子を費して歐羅巴中の圖書館に就いてマルコ・ポーロ旅行記のあらゆる寫本を對比検討して其の系統を考へ之に新たな分類整理を施した。ユール及コルディエの數へた寫本の數は七十八であつたが(一九〇三年のユール本に八五部、一九二〇年のコルディエの補註本に七部、計九二部が擧げられてゐるが、ベネデットの檢した所では

其内十四部は重複、所在不明等で實際はこれだけの數となると云ふ)、彼は其の外に六十部を數へ、加之其等新發見のものゝ内には寫本の系統を辿る上に重要な手懸りとなつた一寫本(彼は其をZ寫本と名づける)すら含まれてゐる。斯くして古文書學並びに文學史に關する彼の深き造詣は、マルコ・ポーロ旅行記の成立・傳來に就いての在來の考へ方を根柢より打破してしまつたのであつたのである。彼の新見解は、既に石田幹之助氏が昭和七年秋東洋文庫第十九回東洋學講座「蒙古史上の最近の諸發見」と題する講演中に於て紹介せられ、其の頗る要領を得た概要筆記が史學雜誌第四十四編一號彙報欄に掲載されており、それよりも稍詳しい概要がペンザーに依り書かれて居る。又ベネデットの勞作の邦譯も近く世に出るとの事である。されば今更管々しく述べるにあたらぬかも知れぬが、一面、此が充分には知られてゐない様に見うけることも間々あり、且後日掲載すべき此旅行記の註解との關係上、次に一應の概略だけ紹介することゝしたい。

「序論」は次の七章に分けられる。

一、佛伊混淆文本の撰修(F)。

二、グレゴワルの改修本(FG)。

三、トスカナ語の譯本(TA)。

四、ヴェネチア校本(VA)。

五、フラ・ビビノ譯本。

六、Fに至る以前の狀態。

七、影響並に諸殘本。

即ち寫本を四つの系統に大別し、第一―五章を以て其等の考證に充て(第五章のものは第四章の系統の一分派である)、後の二章が其の結論と見る可きものである。

1、佛伊混淆文本の撰修(F)

パリ國民圖書館所藏寫本 fr. 1116 を以て其の代表とする系統である。マルコ・ポーロ旅行記のフランス語の寫本は全部で二十部存するが、其の内寫本傳來の歴史の上から取上げられるのは右の fr. 1116 本及び大英博物館所藏の一殘本のみであつて、此の兩者は共にイタリア語、イタリア風の語尾の著しく混じたフランス語で書かれてある。之をFと名づける。

パリの國民圖書館所藏の寫本 fr. 1116、即ち所謂地理協會本の原本は十四世紀初め明かにイタリア人と思

はれる専門の寫書生に依つて書かれた寫本である。傳來に關しては、一五一八年にプロワ王立文庫より移されたことが知られるのみで、詳しい來歴は判つてゐない。地理協會本なる名のある所以は一八二四年にフランス地理協會に依り *Recueil de voyages et de mémoires* の中に收められて印行されたからであるが、此の版は誤字、誤註が多い。其後も一八六三年にバルトリ A. Balholl、一八八二年にリアン伯 Riant 等に依り一部が重印され、又マレイ Murray の英譯、ラザリ Lazari の伊譯が刊行され、次いで一八五五年にシャルトン Ed. Charton の *Voyageurs anciens et modernes* に收められて出版された事がある。

先づ問題となることは此の本の筆者なるルスティケロであり、次いで彼とマルコとの協力が如何に爲されたかである。F本の開卷第一章にマルコは彼の旅行の冒險綺談を共にゼノヴの獄に居た囚人ビザのルステイアウス *Lusticius de Pise* に筆記せしめた (*first retraire*) と記されてゐる。此の名は本に依つて Rustico, Rustazo, Rustichelm, Reustregielo, Rustapisan 其他様々に書かれて居り、最も頼るべき此のF寫本に於て

も筆寫である以上 *Lusticiae* の *u* と *n* は區別し難く其の正しいイタリア名の判斷は區々であつたのをベネデットは *Lustichello* と斷じた。(尤もユールも既にさう考へてゐたのであつたが彼はむしろ普通には *Lusticiano* と呼び、一般にもその名が行はれてゐる) 此が即ち當時アーサー王傳説 *Arthurian Legends* の纂修者として名のあつた *Lusticien de Pise* であることは古くより知られて居り、その作品も多少今日に傳はつてゐる。併し彼の經歷を知るべき資料は今日甚だ乏しく、詳しいことは判つてゐない。

さて此の旅記の撰修にあたつて右のルステイケロは如何なる性質の、又如何なる程度の協力を爲したのであるか、云ひ換へれば、今日我々が見る旅行記は一體どの程度までマルコの語つた話が傳へられ、どの程度までルステイケロの手が加へられたのであるか。從來はマルコの話が其のまゝに書き取られたと考へられてゐたのであつて、其の論據は大體次の通りである。

(1)、同一の地名・人名が一つの章の中に於てさへも異つた形で書かれてゐることは、他の證明がないにせよ、東洋の音に慣れぬ筆者が話者の言葉を聞いたま

まに寫しとつたことの強い證據である。

(2)、著作の外見から云へば、統一がなく亂雑になつてゐる點は、作者の文學的素養のないことを示す。

(3)、文體は拙劣粗野であつてルステイケロの他の作品とは甚だ趣きを異にして居り、此の F 本に用ひられたイタリア訛りの甚だしい變態フランス語はマルコが用ひたと覺しきものである。

右の諸項はベネデットに依つて一々明快に否定された。

固有名詞の不統一と云ふことは F 本に限つたことでなく、比較的正確な校本に於て却つて甚だしい。

體裁に關しては、冗々しい敘述、追記訂正、勿體ぶつた表現等から見て即興の談話のまゝと見ることは當を得て居ない。斯る冗漫な筆致、管々しい反覆はむしろルステイケロの文章の特徴と見られる所である。

而して最後の文體、言語の點はベネデットの大意を用ひた所である。此の問題に關しては古くボーティエ其他は F 本はアーサー王ロマンス集成に見えるルステイケロのそれであると考へたが、之に對しては其後異議があり、特にユールは強く否定してゐたのであ

る。ベネデットが文體・言語の比較の爲持ち來つたのはエリヤ・ド・ボロン Hélye de Borron 原著の傳説の節略であるが、此は口述を寫したのでなく、原作をルステイケロが彼自身のスタイルに改作したと云ふことが明かなものである。斯くて綿密な比較研究の結果、彼はF本全體に涉つてルステイケロ獨特の筆致の例を實に多數に我々に示した。加之、其の傳説はF本と同様のイタリヤ訛り變態フランス語で書かれてゐることを併せて示し、此の言語はルステイケロの用ひてゐたものであると主張した。此の旅行記の文が雅致を缺くと云はれてゐたが、必ずしもさうではなく、元來平明に書かれてゐたのが、傳寫の間に歴史・綺談の類が次第に簡略化されたもので、或る頁には散文ロマンスの持つ力強い素朴さがある。又本書の文體には文人でなければ見られぬ物慣れた落ち着きが見うけられる。なほルステイケロの用ひたものとされた此の奇妙な言語は祖本に用ひられたものであることは疑のない所であるが、彼が斯る言語を用ひた理由は、彼の學問自慢の結果なのか、それともフランスに旅行乃至滞在してゐたことの爲なのであらう。同時に斯る言語を知つてゐた

管のマルコの影響も認めて宜いと説く。

即ちルステイケロは、マルコの旅行事實綺談と、エリヤ・ド・ボロン原著の怪奇幻想譚とを同様の佛伊混淆文、同様の筆致で書いたのである。しかも本書の大部分は創造でもなく節略でもなく正確な根據に基づいて忠實に書かれたものゝ様である。つまるところ、右の如きルステイケロの立派な表現は、東洋に長く居た爲に西方語で正確に表現する事を考へないマルコの覺え書を西方人に判る様な文語で以て敷衍したものに違ひない。然らば、ルステイケロはマルコの物語の編者、或はF本の作者と呼ぶ事が出來やう。卷頭の rectaire は「語る」racontare「説明する」espore の意に解すべきであらう。即ちマルコ・ポーロの物語は珍奇、豊富、其の本質である敘述の正しさを持つてゐたものでありルステイケロはそれに文章の着物を着せ修辭の飾りを添へたものであつた。此の筆者が冒險物語の描寫に極めて忠實であつた事は充分に認められる。併し更に進んで撰修に當つて材料の取捨・按配にどれ程手を入れたかといふ事迄は判斷の術がない。

さて我々は結論に急がう。繰返して云ふ様に、F本

は從來ゼノヴの獄に於けるマルコの口述をそのまゝ寫したと考へられる祖本の忠實な寫しと信じられて居り、他のテキストの之と相違する點は追記、或は間接の校訂と考へられてゐた。けれども此のF本は決して祖本と同一でない。原型の破壊がかなり行はれてゐて祖本に非常に近いとさへ考へられぬ。形式から云へば更に整つた、實質から云へば更に豊かな祖本が此の前に存したことを認めざるを得ない。此の本が傳寫の間に次第に貧弱・簡略となり、形も様々に歪められて行つたものである。而してF本は實に既に斯る二次的な形を示してゐるものである。

此の系統に屬する大英博物館所藏の Cottonian Codex Otho D. 5 に就いて一言しよう。此は十四世紀初頭の寫本であるが火災に遭つた爲損傷が甚だし。マルコ・ポーロ旅行記は後に説く様に他の系統の譯本が専ら世に行はれたのである。然るに一斷片とは云へ此の本が存することは、此の旅行記が原語のまゝでも流布した事を示す證據となる點に於て重視すべきものである。

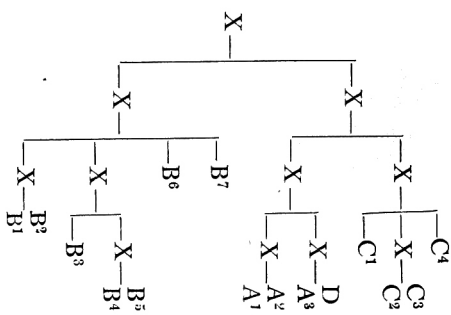
2、グレゴワルの改修本(E_G)

第二の系統にベネデットは右の如き名をつけたが、判り易く云へばマルコがティボルド・セボワに贈つたとの言ひ傳へのある本を祖本とする系統であつて、ポーティエが底本とし、更にユールが據つたもので、我に最も親しみの深かつた系統である。

第一系統に屬する一本が十四世紀初頭にフランスに齎されて、グレゴワルに依り標準フランス語に書き改められたのが、此の系統の祖本であるが、其は今日傳はつてゐない。此の系統には今日十五部の寫本があるが(ユールは五部を知るのみであつた)、之を更にA・B・C・Dと四小群に區分する。而してAには三部、Bには七部、Cには四部、Dには一部が含まれる。

(次頁系圖參照)

A・A²は共にパリ國民圖書館の所藏であつて、A¹はポーティエの底本となつたもので彼がA型と名づけたもの、A²は他の諸種の旅行記と併せて一部を爲す寫本で澤山の美しいミニアチュールが描かれてあるので有名なもの、ポーティエの云ふB型であり、同じく國民圖書館所藏のB¹本がポーティエのC型である。



B³（ベルン市立圖書館所藏）・I⁴・B⁵（ゼネバ圖書館所藏）の三本に見えたマルコがテノボーに贈つたと云ふ序文から先づ説かう。其は左の如き意味のことが書かれてある。

此の本は Cepoy の騎士、故 Thybault 殿がヴェニスの市民マルコ・ポーロ殿に御所望になつたものである。そのマルコ・ポーロ殿は久しい年月を様々の國にて過し、其等諸國の風習に通じて居つて、彼の見聞を世に傳ふ可く著す所の本の最初の寫し (Tal-

premiere copie de son dit livre puis qu'il l'eut fait)
をフランスの王子にしてヴァロワ伯なるシャル、殿
下に獻する爲に右のティボーに渡した。ティボーは
それをフランスに持歸り、彼の死後長子の Jehan が
又寫しを作つて主君ヴァロア伯殿下に獻じた。それ
を所望する友人達に寫しを作つて與へた。……其は
一三〇七年の八月に作られた。(人名の綴字は B² に
従つた)。

ティボー・ド・セボワは初め Philip le Bel に仕へ、後に其の弟のシャルルの臣となり、一三〇六年君命を奉じてパリを發しコンスタンチノープルに赴いたのであつて、其の途次マルコと相識つたのである。

右の序文は、此の系統の本に用ひられた典雅な文章と相俟つてマルコの修訂本として大に重視され、ポーティエは之を彼の版の底本としたのであつた。併しベネデットは全然之を信用せず、此の系統にティボーの名すら用ひぬ。其の理由は問題の序文の直ぐ次の「プロローグ」に於て一二九八年に書かれたと云つてゐる本の「最初の寫し」が一三〇七年になつて漸く作られたとするのは不合理だといふのである（之に對してベ

ンザーはさればとて其の時に既に書かれてゐたとの證據もないと言つてゐるが、此は取上げて問題にしないともよいであらう。さうして此の日附を修訂本を作つた時のそれであらうと説き、更にマルコ自身が監修したといふ點にも殆んど信用を置かぬ。

斯くして從來とは全く異つた意見を提出した。即ち初めに述べた様にグレゴワルなる者が第一系統の一本に基づいて改作したと云ふのである。其の證據は A_1 及 A_3 の冒頭の序文に其の事が見える。 A_1 本には

Cy commandant les rebriches de cest livre.....lequel
ie Grigoires *contrefusi* du livre de Messire Marc
Pol.....

とあり、 A_3 本は *contrescripts* と云ふ字を用ひてゐる。然らば FG 系は從來信ぜられてゐた様に F 本の單なる寫しでなく改作したものである。而して D 本のクビライ汗の事を述べた條に「可汗が即位せられてより今年即ち一二九八年まで」と他本にある箇所が「一二〇八年」とあり、此の D 本はもつと後世のものであるから此の年代はものまゝ寫したものに違ひなく、これが改作の時期を云つてゐるのであらうと云ふ。

此の FG 系統は從來 F の改訂本とされてゐたのであつた。成程 F₁ は F と非常によく似てはゐるが決して F を祖本とするものではない。或は F に行文が見え、或は F よりも詳しい箇所もある事よりその事は證される。従つて此の兩者は第一系統の一本 (E_1) を祖本とするものゝ如く考へられ、いはゞ E_1 を父として兄弟關係にあるものである。而して FG は F に比べて著しく簡略になつてゐる。又此の系統が重視されてゐたことは先に述べた通りである。

3. トスカナ譯本 (TA)

十四世紀の初めに F₁ 及び F₂ に殆んど同様の第一系統の本 (E_2) がトスカナ語に譯出された。此の系統に屬する寫本は今日五部残つてゐる。(TA¹⁻⁵)

右の内 TA¹ は現在フィレンツェの國立圖書館所藏のもので “Codex della Crusca” なる名で古くより知られてゐた本である。TA²、TA³ も共に右圖書館所藏、TA⁴ はパリ國民圖書館、TA⁵ はローレンス圖書館の所藏である。

其の他に二部、稍々類を異にするものを附加へねばならない。其の一は、パリ國民圖書館所藏寫本 lat.

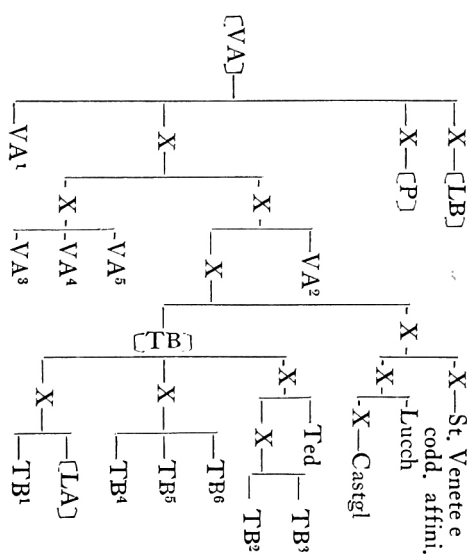
3195である。オドリク其他多くの旅行記と共に一冊に收められたもので、頗る美本であり、古くから學者の注目する所であつた。その内容はトスカナ譯文に、後に述べるビビノ譯本が錯つたものである。一八二四年パリ地理協會の「旅行記集成」出版の際に III6 の附録として同書に收められたことがある。

他の一つはフィレンツェの詩人プッチ Antonio Pucci が彼の“Zibaldone”の中に收めて出したトスカナ本の節要である。

さて、右の五部の内 TA¹ は最も年代の古いものであるが、惜むらくは完本でなく、且 F 本とはかなりの隔たりがある。此等五部相互の間の差違を検して以て祖本なる F² の形が或程度復原出来るが、此の F² 本は F ではなくて然も F に近いものであつてグレゴワール系の TA¹、後に説くヴェネチア本の祖本と共に四者は兄弟關係にあるものである。此の系統の有する價值は F 本の訛誤、亂雜を正すことゝ、又 F 本の缺文を補ふ上に役立つことゝである。後者の例は本書 XCIX 頁に列擧してあるがそれを寫してこゝに出す必要はなからう。

4. ヴェネチア校本

此の系統は極めて重要なものであつて、第五章に於て別に説かるゝビビノ譯本も之に屬するのであり、此のビビノ譯本が頗る名聲を博し、ビビノのつけた折紙に従つて此の系統こそポーロの原本であると信ぜらるるに至つた程のものである。此の系統には數ヶ國語の重譯、重譯の又重譯があり、寫本の數は總て八十を超え、其の關係は頗る面倒であるから先づ系圖をお目かけよう。



右の系圖に見る如くヴェネチア語本には現在五部の寫本(VA¹-)がある。其内、完本は VA², VA⁴ S二部のみである。VA¹ (Casanatense 圖書館所藏)は殘本ではあるが、ビビノ譯本の台本となつたものゝ直接の寫しであるが故に重視すべきものである。

次にトスカナ譯本の祖本(TB)を想定し、其の子孫が六部あり、更に獨(Ted)・羅(LA)に重譯されたのであるが、更に此のTBに似た一本から出た二系統がある。一は(a)ルッカ Lucca 官立圖書館所藏の十五世紀のヴェネチア語寫本及び(b)ヴェネチア語寫本よりの Santanallo のスペイン譯より成り(此の(b)に就いては後にフランプトン英譯本を説く際に詳しく述べる)後者は Sessa 一四九六年刊の印本及びそれと類似せる寫本、或はそれに依れる諸版本より成る。ルッカ本及びセッサ本は共にオドリックの旅行記の抄録が始めに書かれてある。兩系統相互の間の差違はさう甚しくはない。Ted. は十四世紀後半に獨譯され今日各二種の版、寫本がある。LAの寫本は五部、外に伊譯がある。而して其の他に相互の間に關係のない二種のラテン譯本(P, LB)が之に屬すると考へられる。Pに就ては

章を改めて詳説する。

つじ此等 VA, TB, P, LB等の系統は言語は様々であるが、同一の祖本より出たことは明かである。而して此の系統の祖本 VAは第一系統のイタリア訛りフランス語本の一本(F²)から直接に譯されたものであつて、それは F・グレゴワル改修本の祖本 E・トスカナ譯本の祖本 F¹と共に兄弟關係にあるものである。

註

- ① The Asiatic Review. 第二四卷第四號、第二五卷第一、二號(一九二八年十月、一九二九年一、四月)及び同氏編マルコポーロ旅行記フランプトン英譯本序文。
- ② 此の問題に關つては A. A. Mischelli の Chi fu e cosa fece Rusticello da Pisa なる論文を Atti. del R. Istituto Veneto Scie. Let. de Arti. t. 133. Parta 2^a 1924—5誌上にあり、之に對するヴェネットの駁論が Giorn. Stor. d. Let. Ital. 誌上にあるとの事であるが、兩誌の其の號が見當らず參看するを得なかつた。
- ③ パリ國民圖書館所藏寫本 fr. 1493.

(イタリア語に全く不案内であつた私は本稿を草するに當つて黒田正利先生に尠からぬ御指教をお願いした。記して以て厚く謝意を表する次第である。)